

科目名	行動分析学特論Ⅱ	担当教員	杉山尚子
科目属性	専門科目 B	単位数	2単位
<p><b>【授業の目的・ねらい】</b>          本研究科に提出される修士論文の多くは調査研究で、実験操作を伴う研究は必ずしも多くありません。しかし、広い意味での教育実践（学校教育だけのことではない）に携わる諸君にとって、目の前にいる問題解決が必要な対象者の行動を介入操作によって変えること、そしてその介入操作の効果を科学的に検証する技術を習得することは、とても大切です。介入操作の効果検証は多くの分野で群間比較法を使って行われますが、目の前にいる少数の対象者の行動を変え際には使えない手法です。それに対し、行動分析学では一事例の実験デザイン（single-case experimental designs）と呼ばれる少数個体対象にして、介入効果を検証する実験計画法が開発されてきました。</p> <p>本科目の目的は下記の4つです。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 一事例の実験デザインよばれると実験計画法について学ぶ。</li> <li>2. 一事例の実験デザインの実験計画を立案することができる。</li> <li>3. 得られたデータを視覚的に表現できる（効果的なグラフの作成）</li> <li>4. グラフに表現されたデータを目視分析（visual inspection）できるようになる。</li> </ol>			
<p><b>【授業計画】</b>          本科目の15回の授業計画は、以下のようになっています。</p> <p>第1回：行動的な研究とはどのようなものか</p> <p>第2回：日常的興味と科学的好奇心</p> <p>第3回：研究論文の種類</p> <p>第4回：観察、調査、実験</p> <p>第5回：因果関係と相関関係</p> <p>第6回：群間比較法と個体内比較法</p> <p>第7回：個体内比較法（反転法）</p> <p>第8回：個体内比較法（多層ベースライン法）</p> <p>第9回：個体内比較法（基準変化法）</p> <p>第10回：個体内比較法（条件交替法）</p> <p>第11回：実験データの科学的重要性</p> <p>第12回：データの信頼性と妥当性</p> <p>第13回：直接的再現（direct replication）</p> <p>第13回：系統的再現（systematic replication）</p> <p>第14回：グラフの読み方</p> <p>第15回：よいグラフの書き方</p>			
<p><b>【評価方法】</b>          授業は、教材学習ならびに科目修得試験に合格して単位の認定となります。</p> <p>評価については、レポート課題が50%、科目修得試験50%の割合で総合しての評価となります。</p>			
<p><b>【教科書】</b>          バーロー, M, &amp; ハーセン, D. (1997) 一事例の実験デザイン：ケーススタディの基本と応用 二瓶社 (ISBN-13: 978-4931199378)</p>			

**【参考図書】**

Reynolds, G. S. (1975). A primer of operant conditioning.

浅野俊夫訳. (1978). オペラント心理学 入門 ISBN-13: 978-4781900438

Sidman, M. (1960).

Tactics of scientific research: Evaluating experimental data in Psychology. Basic Books.